

平成 27 年度

第 2 回

地域自立のための「人づくり
・学校づくり」実践委員会

議事録

平成 27 年 7 月 9 日（木）

第2回 地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会 議事録

1 開催日時 平成27年7月9日(木) 午前10時から午前12時まで

2 開催の場所 県庁別館9階特別第一会議室

3 出席者 委員長 矢野 弘典
副委員長 池上 重弘
委員 奥島 孝康
委員 片野 恵介
委員 加藤 百合子
委員 清宮 克幸
委員 鈴木 竜真
委員 藤田 尚徳
委員 堀田 和美
委員 マリ クリスティーヌ
委員 宮城 聡
委員 六車 由実
委員 藪田 晃彰
委員 渡邊 妙子

知事 川勝 平太

4 議 事

- (1) 意見交換 社会総がかりの教育に向けた地域の人材の活用(人材バンク)
- (2) その他

【開 会】

事務局： それでは、定刻になりましたので、ただいまから第2回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会を開催いたします。

委員の皆様におかれましては、本日はお忙しい中、またお足元の悪い中、当委員会に御出席いただきまして、誠にありがとうございます。

私は、本日司会を務めさせていただきます文化・観光部総合教育局の鈴木と申します。よろしく願いいたします。

なお、本日は資料として、1枚目に次第、2枚目に座席表、3枚目に委員の皆様の名簿の一覧を掲載させていただいております。御確認のほど、よろしく願いいたします。

なお、まだ加藤暁子委員がお見えになっておりませんが、本日は、名簿の中段の後藤康雄委員、それから仲道郁代委員が御欠席ということで御連絡をいただいております。よろしく願いいたします。

それでは、開会に当たりまして、知事から御挨拶申し上げます。

川 勝 知 事： おはようございます。

なかなかすっきりしない日が続きまして、うっとうしい、また足元の悪い中、お越しいただきまして、本当にありがとうございます。

さて、これで第2回目ということになります。昨年度は検討委員会だったので、検討していただいたと。それが今回は、実践委員会でございますので、実践をするためにこの委員会を開催しているということを変更して確認をさせていただきます。

第1回目の折に、教職員並びに高校生の国際化ということについて、こちらで意見を伺いました。その意見を踏まえまして、総合教育会議という、私と教育委員の皆様方とで、しかも私が司会をする形で進める会議で提言いたしまして、そしてこちらから、矢野委員長は御都合が付かなかつたので、池上副委員長に御出席いただきまして、るる御説明をいただきましたけれども、全面的に賛成するというので、高校生の海外への修学旅行、また先生方の海外体験、さらにまた静岡県にいる外国人の子供たちと交流をしっかりとすることですね。

さらにまた、自分たちのことをよく知らねばならないということで、自らの文化、伝統、産業等について、そういうものを踏まえた国際人になるべきだということをお池上さんからいろいろ説明していただきまして、全て賛成ということになりまして、どうもそれが国に聞こえたみたいで、国際交流基金の理事長、安藤さんという、前のイタリア大使ですけれども、今、国際交流基金の理事長をされておまして、それで、静岡県の先生を中心にして、先生とは限らないのですけれども、海外で日本語を教えている学校のクラスを手伝ってくれと言われて、もう一も二もなく賛成と。

JETプログラムと申したか、日本にアメリカの若い青年が来て、英語の授業を日本人の先生がやっているでしょう。そうすると、日本人の発音ですから、少し違いますよね。それをきれいな英語の発音にさせていただけると。それから、文字どおりネイティブですから、初めて青い目の金髪というのは変わりませんが、そういう外国人をじかに見ながらそのお話を聞くというプログラムをアメリカの青年が日本の学校に来てやっている、たしかJETプログラムだと思います。その日本版を東南アジアを中心にやりたいと。

ですから、そこで「おはよう」と言ったら「おはようございます」と言いますとか、「こんにちは」と言ったら「こんにちは」と言いますとか、そういうお手伝いをするパートナーシップのプログラムをやるので、静岡県にやっていただきたいと。3,000人位考えているということですね。もう、そんなのは370万人いるからわけありません。

そんなことで帰ってきましたけれども、そういう形で内外に広がっております。

今回も、こちらで出していただきましたものは、できれば委員長先生

にも御出席賜りまして、この次の総合教育会議にそれを持ち込んで、実践に落とししていくというふうにしたいと思っています。そういう意味で、完璧でなくても、やるということを前提にした御提言をいただくようお願い申し上げます。冒頭の挨拶といたします。よろしくお願ひいたします。

事務局： ありがとうございます。

なお、加藤暁子委員につきましては、ただいま御欠席の連絡がありましたので御報告させていただきます。よろしくお願ひいたします。

次に、今回、初めて実践委員会に御出席いただいた方に御挨拶をお願ひしたいと思います。

まずは、奥島委員、よろしくお願ひいたします。

奥島委員： 今回初めて出席させていただきます奥島です。よろしくお願ひします。

今年は、大正4年から数えてちょうど100年に当たりますが、私が関係しているものが幾つも100周年に当たりまして、大変忙しいので出られないと思ったのですけれども、川勝知事との友情で何とか出席したいと思っております。

と言いますのは、私がやっております白鷗大学がちょうど100周年、それから高校野球が100周年ということで、今年は大変になると思ひます。

それから、ボーイスカウトが23回世界大会で、2万7,000人が日本にやってきますので、全部で3万5,000人位の規模で、山口で夏にやることになりました。それから、日本で初めて、18歳以下、つまり高校生のワールドカップが大阪で行われます。それもやらなければいけないという、責任者的な役割が当面続いておりますので、今年には本当に御出席できるかどうか、できる限り出席しますが、そういうことでひとつよろしくお願ひいたします。

事務局： ありがとうございます。

続きまして、宮城委員から御挨拶をよろしくお願ひいたします。

宮城委員： 静岡県舞台芸術センターの芸術総監督をしております演出家の宮城です。

ちょうど昨日、先生方の教育研究会に出席して、僕が演劇をやってきた中で、今の若い子たちを見ながら感じていることをちょっと申し上げました。

僕は今、自分たち劇団の中で、国語の教科書に出ている論説文を戯曲の形にして、それを授業で取り上げてもらえないだろうかという提案をしております、何でそんなことを考えたかと申しますと、今の学校の授業の中で、相手に向かって言葉を言うという、誰か具体的なフ

オーカスがあってその人に言葉を言うという時間がほとんどないのですね。今の子どもたちは、文章を書くのはとても上手になっていると思うのです。しかし、ほとんどがひとりごとなのです。インターネットにあふれている言葉のほとんどがひとりごと。そのひとりごとを見て、自分と同じ考えだと「いいね」と言って、違う考えだと罵倒する。

つまり、相手の言葉を聞き、それによって自分が、何がしか変わり、そして自分の言葉を相手に投げかけて、相手も変わっていくかもしれないと期待するという、こういう当たり前のやりとりがほとんどなくなっている。また、何かそれを多少なりとも改善の方向に向かわせる演劇人なりのささやかな寄与はできないだろうかと考えて、教科書のテキストを戯曲化するというのを思い付きました。

その根底にあるのは、自分は変わり得る存在だという信心というか、そう信じたいという気持ちといいますか、つまり、今、できないこともできるようになるかもしれないし、今興味がないことにも興味を持つようになるかもしれない。今、想像できないことが想像できるようになるかもしれないという、自分が変わり得る存在だという前提を信じないと、演劇もそうですし、コミュニケーションというのは、本当は始まっていかないのではないかと考えています。何よりも、そのことを若い人たちにどうやって伝えていったらいいのか、そんなことを今考えているところです。

事務局： ありがとうございます。
それでは議事に入ります。
これからの議事進行につきましては、矢野委員長にお願いします。

矢野委員長： 皆様、おはようございます。
足元の悪い中、お集まりくださりまして、また大変遠路のところ、誠にありがとうございました。
また、奥島委員、宮城委員にはお引き受けいただきまして、ありがとうございます。これからもよろしくお願いします。
それでは、きょうの会議次第に従いまして、意見交換に移りたいと思います。
本日のテーマは、社会総がかりの教育に向けた地域の人材の活用（人材バンク）であります。
まずは、配付資料につきまして、事務局から説明をお願いします。

事務局： それでは、事務局から御説明いたします。
お手元の資料の1ページを御覧いただきたいと思います。
資料1の「地域とともにある学校づくりに向けての提言」でございます。
この提言は、昨年度末に「地域とともにある学校づくり検討委員会」

からいただいたものでございます。この提言では、「2. 具体的取組」として5つの取組を御提案していただいておりますが、本日のテーマである人材バンクにつきましては、網がけしましたところ、「(2) 文武芸の三道鼎立」、「静岡県の一部活動を支える地域資源の活用を推進し、人材バンクの構築を図る」との御提案をいただきました。

また、具体的取組以外にも、3ページを御覧ください。

「3. 今後の検討課題」といたしまして、何点か読み上げます。

「部活指導の地域化の推進に向け、地域単位で動く仕組みをどのように構築していくか。」、「地域の優れた人材が子どもたちと接する機会をどのように増やすか。」、「優れた外部指導者を確保するため、各指導者の質をどのように保証していくか、また、指導者への謝金はどうあるべきか。」、「年齢や性別、国籍にとらわれず、どのように幅広い協力を得ていくか。豊かな教養や経験、哲学をもつ定年退職者からどのように協力を得るか。」といったことを御指摘いただいております。

次に、4ページを御覧ください。資料2「本県の主な人材バンク関連事業一覧」でございます。

これは、現在、県が実施しております事業の中から、幅広く人材バンクに関連するものを選び、一覧としてまとめたものでございます。

左から順に、まずは学びの宝箱でございます。これは、教育委員会事務局が整備いたしました人材バンクでございます。人材の情報をデータベース化して、インターネット上で学校等に提供しております。授業や学校行事の支援、あるいは部活動や地域活動の支援を行うため、現在約2,300人の方に御登録いただいておりますが、利用者である学校側から、登録者の人柄やレベル・能力といったものが把握できないといった課題があり、26年度に実際に活動された方は6人となっております。

次に、トップアスリート等派遣事業でございます。この事業は、人材バンクではございませんが、教育委員会事務局が中学校の依頼を受けて、部活動ごとにトップアスリートの方を指導者として派遣する事業でございます。

次に、しずおか型部活動推進事業でございます。お手数ですが、7ページをお開きください。この事業は、2の事業概要の区分の欄にありますとおり、4つの事業から成っております。例えば、一番上の外部指導者派遣につきましては、県立高校等の運動部、文化部の活動を支援するため、スポーツエキスパート派遣事業や文化の匠派遣事業として、それぞれ専門的スキルを持った地域の指導者等を派遣しております。先ほどのトップアスリート等派遣事業とあわせ、学校側の評価の高い事業だと伺っております。

申し訳ございません。4ページにお戻りください。

次に、人づくり推進員活動事業でございます。この事業は、当課、総

合教育課が実施しておりますが、県の委嘱した人づくり推進員が、幼稚園や小学校等で、しつけや子育て等についての懇談会を実施し、保護者や地域住民の皆さんに助言や啓発を行うものでございます。部活動の支援事業ではございませんが、各地域で人づくりに取り組んでいる方を登録し、幼稚園等からの依頼に基づいて派遣する事業でございますので、参考として紹介させていただきました。

最後に、学校支援地域本部推進事業でございます。この事業は、市や町が実施している事業でございます。国と県が補助金を支出して支援しているものでございます。この事業は、学校単位、地域単位で学校支援地域本部をつくり、御登録いただいたボランティアの方を各学校に派遣して、主として、校庭の草取りや登下校の安全指導を行っていただく事業ですが、派遣するに当たっては、コーディネーターが学校とボランティアの皆さんの橋渡しを行うところに特長がありまして、学校側も利用しやすい事業制度となっております。

以上、5つの事業につきましては、資料3の本県の主な人材バンク関連事業として、5ページから9ページにかけて事業ごとに資料を掲載しております。

続きまして、10ページの資料4「他都府県の人材バンクの主な事例」でございます。

この資料は、他の都道府県が実施している事例の中から、比較的規模の大きな東京都、神奈川県、大阪府の事例をまとめたものでございます。3つの都府県のいずれの事業も、授業や部活動を外部人材に支援してもらう内容となっております。

続きまして、11ページの参考資料1「本県が実施している外部人材を活用した取組」でございます。これまで御説明させていただきました事業のほかに、本県が実施しております外部人材を活用した事業を取りまとめてございます。

最後になりますが、15ページの参考資料2「第2回静岡県総合教育会議議事要旨」及び、別冊となっておりますが、「第2回静岡県総合教育会議議事録」でございます。6月17日の第2回静岡県総合教育会議におきまして、教職員及び高校生の国際化について、知事と教育委員会が協議を行いました。当日は、池上副委員長にも御出席いただきまして、実践委員会を代表して御発言をいただきました。

5の出席者発言要旨にありますとおり、実践委員会におけます御提案を、白丸で記載しました3つの視点にまとめまして、総合教育会議におきましては、これらの視点ごとに御協議いただきましたが、協議の結果、知事部局、教育委員会事務局が、それぞれ可能なものから具体化に向け取り組んでいくことが合意されたところでございます。

以上で、事務局からの説明を終わります。

矢野委員長： どうもありがとうございました。

ただいまの事務局の説明に関しまして、御質問があらうかと存じますがけれども、意見交換の中で、それを御提示いただければと思います。

それでは意見交換に入ります。

本日のテーマであります人材バンクは、昨年度の「地域とともにある学校づくり検討委員会」が取りまとめた提言の中で、人材バンクの構築と周知を図るとされたものです。ただいま事務局から説明がありましたとおり、これまでも、県は学校の教育活動、あるいは部活動の中で外部人材を活用したいろいろな取組を行ってきました。しかし、これらの取組の中には、しずおか型部活動推進事業のように、学校から好評を得て活用されているものもあれば、学びの宝箱のように、必ずしも十分に活用、利用されていないものもあります。

また、現在の県の取組は、各部局の個々の取組にとどまっており、県を挙げて外部人材を活用していくという体制にはなっておりません。そこで、既存の取組を生かしつつ、利用者がもっと使いやすい人材バンクを、私なりのイメージを描いて持ってまいりました。机上にお配りしております委員長提案と書かれた「新しい人材バンクのイメージ」について、少し説明をさせていただきます。

これについて御議論いただいた後で、清宮委員から提案されております地域のスポーツクラブについて、順番に審議していきたいと思っております。

まず、委員長提案と書かれた横書きの紙がございますので、それを御覧ください。

1 ページ目の左の図のとおり、現在、県は、学校の教育活動、あるいは部活動の中で、外部人材を活用したいろいろな取組を行っております。

しかし、先ほど申し上げたように、全ての事業が十分に活用されているというわけではありません。その理由として、県がつくった人材バンクに登録していただいた人材と、利用者とのマッチングが十分に行われていなかったということが、理由の一つとして考えられます。また、このような形では、地域にいらっしゃる能力や意欲のある人材を十分に活用し切れていないのではないかと、危惧しております。

そこで、これまでの行政の取組を再構築して、県を挙げて、地域の人材を活用する社会総がかりの人材バンクの構築を考えました。

1 ページ目の右の図を御覧ください。

「新制度創設後」と書かれたイメージ図でございます。具体的には、現在、県、教育委員会が取り組んでいる学びの宝箱などの既存の仕組みを活用しながら、文武芸の3分野の人材を公募いたしまして、人材バンクに登録していただき、学校の教育活動や部活動だけではなく、地域のスポーツクラブなどにも人材を活用していただく。それが、児童、生徒の教育の質の向上だけでなく、地域の活性化にもつながるのではないかと考えております。

次に、2ページ目の図を御覧ください。実施体制と書かれたものでございます。

文武芸の3分野の人材を3つの類型に区分することを考えました。左側にありますように、Aとして、一流の人材を部活動の指導等に活用し、報償金や旅費を支給する。Bといたしまして、専門性を有する人材を部活動や学習支援等に活用し、報償金や旅費を支給する。さらに、Cといたしまして、教育に対する理解、熱意を有する人材に、ボランティアとして学校の支援等をお願いしてはどうかと、このように考えるところでございます。

また、右側に書きましたけれども、既存の個々の人材バンクの担当者がコーディネーターとして利用者と人材との間で連絡調整を行うとともに、つまり既存の形を生かした上で、総合窓口のコーディネーターというものを設置しまして、利用者が利用しやすい体制をつくっていききたいと、このように考えます。さらに、県の取組が各部局の個々の取組にならないように、部局の枠を超えた運営協議会を設置して人材バンクを運営していくことが必要だと思います。

以上が、昨年度の検討委員会の議論を踏まえて、私が考えたイメージであります。まだまだ漠然としたイメージでございますが、これを一つのたたき台として、委員の皆様から御意見を頂戴し、人材バンクの具体化を進めていきたいと考えております。去年1年間かけて検討委員会でやったことを、今年実践委員会の場において、このような形で総意として方向付けをして、細部は、これから関係部局の皆さんに検討してもらって、具体化していけばよいのではないかと、考えております。

それでは、意見交換に移ります。どうぞ挙手して御意見を御披露いただければありがたいと思います。

どうぞ。

マリ・クリスティーン委員： とってもいい案だと思います。

一つだけ、少し気になりましたことは、2枚目の図式なのですが、プロフェッショナルでトップアスリートの方々だと、それなりの報酬がないとなかなか出てこられないという現状があると思いますので、このランキングの仕方には全く問題ないと思います。

しかし、これが外に出たときに、ピラミッド方式になっていて、Aは報酬をちゃんといただけるのに、Cはボランティアで無報酬となると、みんなの意気込みがなくなると思うので、ABCではなく、例えば、Aはプロフェッショナルで現役アスリートとか、Bは専門家とか、スペシャリストというネーミングの枠にされて、それでピラミッドを四角にして、四角の中での平らなイメージを作られるほうが、参加される方々も参加しやすくなるのではないかと思います。

ボランティアの方々というのは、本当にボランティアをしたいという

気持ちがおありなので、ボランティアをする方は、一番下の底辺のほうにあるということではなくて、むしろボランティアで無報酬で頑張ろうとする人が一番トップの場を与えられるべきではないかと思うので、この図式の見え方を少し変えられるといいかなと思いました。

それから、県の予算も必要ですが、例えば、私たちも国際交流協会にどこかの企業さんから寄附していただくと、県や市のほうで減税になることがあるのですね。

いろいろな企業に対して寄附の募集もされて、それで県の予算と一緒に加わるような形にして、県だけがすることではなく、みんなが参加できるような形というものも、この図式に書けるといいのではないかと思います。

例えば、サッカーが好きな企業もあれば、テニスとか卓球が好きな企業もあるので、そういう形でもっと予算を増やしていただくと、子供たちもいい思いができると思います。

矢野委員長： 大変、貴重な御意見をいただき、ありがとうございました。

どういうふうに分類の線引きをするのかもなかなかの問題でございまして、こういうピラミッドの絵を出して、みんなが、がっかりするようでは本末転倒ですから、これからしっかり詰めていかなければならないと思います。今お使いになったスペシャリストやエキスパートという言葉がいいかもしれませぬ。決して、固定した考えではなくて、指導者にもいろいろなレベルがあるだろうということを示したものでございますので、これから検討してまいりたいと思います。

加藤委員、どうぞ。

加藤（百）委員： 私も、とてもまとまっていて、ブラッシュアップすれば、良い運用体制になるのではないかと感じてお聞きしていました。

それで、幾つかあるのですけれども、私の娘が公立の中学校へ行っていて、人数が少ないので部活の選択肢がないのですね。部活というと、どうしてもスポーツがメインとなりがちで、野球部ももう廃部になるかならないか、そんなレベルで、本当に選択肢がないです。

なので、どこかに書かれていたと思うのですが、広域で部活を運営するとか、この専門家の方たちが率先して、私だったら、一つ作りたいたいの、数学部みたいなものを作りたくて、理系教育をしっかり学べる場が欲しいと思っているのですけれども、そういう新設したいというやる気をどこかに落とし込むというのが、一つあるといいと思います。

あともう一つ、よくある話なのですけれども、人を巻き込むときに、コネクションの多い方とか、実力のある方を何人かつかまえておくと、その方が連れてきた方であれば、ある程度、いろいろなものが保証されていると思いますので、確かに県の事業だと公募になるのかもしれないのですが、簡単に言うと、一見さんお断りではないのですけれど

も、初期に選ばれた方たちにどんどん連れてきてもらうほうが、何かと質といったところでバランスをとりやすくなるのかなと感じました。以上です。

矢野委員長： 登録をする道筋が一本では、少し寂しいですね。狭苦しい組織図は良くないと思っていますので、そこは御指摘のように、工夫の余地があると思います。

それから、活動の中身についても、最初に御指摘があったとおりですが、なかなか最初は細部まで決め切れないかもしれません。ですから、なるべく懐を広くして、変化に対応できるようにしておいて、こういうケースもある、ああいうことをやったらもっと良いというアイデアが出てきたら、これをその都度具体化して、盛り込んでいったらいいのではないかと思います。そういう意味では、今の御指摘、大変ありがとうございました。

どうぞ。

池上副委員長： 池上でございます。

まず、先日の総合教育会議について、知事からも御紹介があったように、この委員会を代表して行ってまいりました。そのことを御報告いたします。

結論としては、本会からの提案を全てサポートしていただいたということで、さらに教育委員の先生方の深い御見識と豊かな御経験に基づいて、とてもイメージが膨らんだ会議だったということを皆様に御報告いたします。

それでは、今の委員長提案について、私から4点、意見を表明させていただきます。

まず1点目は、この新制度創設の右のイメージ、この図のイメージはとても素晴らしいと思います。一元化をすることによって、利用者の目線から見ると、とてもわかりやすい仕組みになるだろうということが期待できます。

2点目ですけれども、今の点と関係するのですが、やはりコーディネーターの役割の重要性というのを、改めて強調する必要があると思います。マッチングに問題があるということがありました。また、加藤委員からも、なかなか一見さんだと難しいかもしれないという御指摘があって、コーディネーターが、登録している方、あるいは学校側のニーズを的確に把握して、調整する役割がうまくいくかどうか、おそらくこの制度の根幹であろうというふうに思います。

3点目は、この議論は、今比較的スポーツのことがメインになっているという印象を持っているのですが、これも先ほど加藤委員から数学部というアイデアもありましたけれども、是非文化系のところでもこの枠組みを使っていけるといいなと思っています。

この会には、文武芸と三道鼎立ということで、まず大きな枠組みがあります。今日は、仲道委員がいらっしゃらないことをいいことに、ちょっと芸のところの話をしたいですけれども、私は高校、大学とジャズ研で、素人わざですが、ピアノを弾いていました。大学はともかく、高校でジャズ研究会がある高校は、ないのです。当然、顧問の先生も形式的な顧問で、見よう見まねでコードを学び、アドリブを学びというようなことをやってきたわけです。もし、あのとき、身近に、そういったものを指導してくれる方がいたらなんと、今回の資料を見て思いました。

静岡県は、皆さん御存知のように、非常にブラスバンドが有名な県です。ブラバン甲子園などというのもあります。そういったところで、クラシック、ポピュラーはもちろんのこと、ジャズ的な曲も結構演奏されるのだけれども、なかなかその指導をしてくださる方が、きっと多くはないのだろうなというのを、高校生の演奏を聞きながら感じる事がままあります。一方で、本県には、楽器の製造企業なども多々あって、技術者として、あるいは総合職として御活躍しながらも、実は学生時代、楽器を演奏していたという方も多々いらっしゃるのではないかなと思って、今、音楽のことだけを言いましたけれども、そういった文化系の分野についても、是非この枠組みがうまく機能するとういこと強く願っております。

4点目は、人材供給の側の仕組みをもう少し考えないと、制度はできたけれども、なかなか人が集まらないのではないかという危惧をしています。今のこの議論の大前提は、昼間、時間のある方、もう少し言うと、退職した方や現在仕事をしていない方が想定されているのではないかと、私には思われて仕方ありません。しかし、学校の部活動は、皆さん御存知のように、平日の、多くの場合、午後の時間帯に行っている。その時間帯に関われる方をどう発掘するかというところを考えないといけないわけでございます。

そう考えたときに、私は、この制度を作るに際して、企業への働きかけが非常に重要なのではないかと感じています。今日は、後藤会長が御欠席なのがとても残念なのですけれども、今、企業では、皆さん御存知のように、地域との関わりなどを評価したり、あるいはワーク・ライフ・バランスを提唱したり、こういったところを評価するような動きもございます。また、最近では、夕活、夕方の活動ですね、夕活を呼びかけるというようなことがニュースなどでもよく取り上げられております。

例えば、企業に働きかけて、この制度へ登録してもらい、午後、例えば、高校の部活動の指導に行く。それが月に1回でも2回でも、そういう活動をする社員の方を、企業の中でしっかりと、そういった貢献を評価していくような制度を作ったりしていくと。こういったところとセットにしていくと、現役で知識も経験も豊富な方々が子供たちに

接することができるのではないかということで、この制度の外になるのですけれども、是非企業への働きかけを併せて考えていきたいと思っております。以上になります。

矢野委員長： 大変素晴らしい御指摘ありがとうございました。

そうした企業への働きかけは是非やりたいと思います。本当に、若手に大勢登録して欲しいですね。そのためには、勤めている先の御理解が絶対必要だと思います。これは、本当に素晴らしい御指摘だと思いますので、是非実行したいと思います。

それから、芸術文化の分野については、宮城委員いかがですか。この文武芸三道鼎立で芸のところを頑張ろうというのは、先生の御指摘が去年ありまして、これを具体化しておりますので、先生、一言いかがでしょうか。

宮城委員： 芸術ほど、本当の一流の人に接することができるか否かが、決定的なジャンルもないかもしれないと思うのですね。つまり、独学でもある程度もちろんできるのだけれども、その先にどういう日常を超えた世界があるかというのは、やっぱり現物というか、その人物を見ないとイメージができないのですよね。ですから、本当に変なというか、ちょっと言葉は悪いですがけれども、こんな人間もいるのだという、そういう実物を見ないと、僕らは自分の周りの人間たちを見て、失敗しないで生きていくということが一番大事だと、若い子たちが思ってしまふ。でも、芸術家というのは、ある意味では、なかなか世の中とうまくフィットしなかった人、一種の失敗者と言ってもいい。しかし、そういう人にも、特殊かもしれないけれども、居場所があるのだという事例だと思うのですね。なかなか世の中とうまくフィットできない人間にも、ちゃんとこの世の中には居場所がある。それを見てもらうことが、若い子たちにとって、本当に空気穴になるというか、窓が開くということのように思うので、つまり一流のアーティストが若い人たちと触れ合う機会を何とか作ればいいなと思います。

矢野委員長： どうぞ。藤田さん、お願いします。

藤田委員： 私も、この新しい人材バンクのイメージというのは素晴らしいと思うのですけれども、既存の学びの宝箱に似ているのかなとも思います。

資料の5ページを見ると、学びの宝箱は、24年度が1人、25年度が5人、26年度が6人ということで、非常に利用が少ないと思います。

学校や市町が独自の情報を持っていたりとか、登録者と学校が繋がらないということが、その原因だと思いますので、もっと人材バンクを使いやすくするためには、コーディネーター、それが学校支援地域本部なのでしょうか、それを拡充させてうまく活用していかないと、

先ほど副委員長のお話にもあったとおり、これをせっかく作っても、活用されなければ何も意味がないと思いますので、コーディネーターを拡充させたり、現場に近い教育委員会や市町がもっと主体的に動いていくことで、これが活用されてくると思いますので、そういう取組が必要だと思います。以上です。

渡 邊 委 員： 佐野美術館におります渡邊と申します。

この素晴らしい人材バンクの人づくりが、まだ地方の教育委員会、あるいは地方の学校に周知されていない。それが大変残念だと思います。

具体的に、私どもは、大体小学校、中学校、それから高校もあるのですけれども、そこで個人的に学校の先生から求められて、当館の学芸員が授業に参加するということをやっています。美術館ですから、いろいろな資料がありますけれども、その資料を教室に持ち込んで授業をするということをしています。

ただ、それは、学校としても、教育委員会としても公式に認められていないので、費用はボランティアです。美術館としては、大変問題なのですけれども、これも一つの社会教育、実際の教育にはプラスになるとあって、かなり努力しています。

高校などは、今、常勤の教員が非常に減ってしまっていて、非常勤教員だと学校の教員の会合に出られないのですね。だから、予算を取ることがまずできない。ですから、人材を教室に迎え入れたいのですけれども、予算措置がほとんどされない。だから、非常に努力して、細々と個人的なつながりの中でやっています。

こういう人材バンクをもう少し教育委員会の中で、又は教育委員会ではなくて、行政としてももう少し制度化すると、非常に生きる制度になるのではないかと思います。以上です。

矢 野 委 員 長： ありがとうございます。

堀田先生、学校のお立場からいかがですか。

堀 田 委 員： 委員長の新制度創設については、総論として非常に賛成です。とても素晴らしいです。

現状の学びの宝箱にしましても、人づくりにしましても、私立は対象ではないのですね。私は、私立学校の校長ですので、この一覧をいただいて、私学に対しては、ほとんどなかったのだなと思いました。

静岡県の場合は、3分の1は私学に在籍をしている生徒ですので、新しいこの創設後の形を見ますと、地域スポーツクラブですとか、地域の団体ですとか、そういった部分でも活用が可能になると。まさに、ふじのくに、有徳の人で、静岡県全体がここに関わっていかれるだろうと、そんな思いがします。

ただ、私学は設置者が、それぞれの建学の精神でこういう形の学校を

つくっていいこう、また公立は、教育委員会の中でこういう学校をつくっていいこうと、また、保護者のほうも、将来を考えた中で、どういう学校、どういう選択肢があるかというような形で考えています。

本校では、静岡県でもう30年近く、インターハイなどにトップの生徒を派遣しておりますが、その中で、人生は長いものですから、将来のことを考えると、あるスポーツに特化して、それで一生食べていけるか。オリンピックに出て、金メダルを取ったけれども、その後どうなるのか。他国のことを考えると、なかなかそれで食べていくのは難しいです。

今、オリンピック選手で松本という水泳の選手がいますが、本校に教育実習に来ました。30代、40代になったときのことを考えると、現役を退いたときに教員になりたいと、免許だけは取っておきたいという考えを持っていました。高校3年間、また大学で、こういう形で文武芸、いろいろな部分で全力を尽くすというのは、とても大事です。

ただ、その方法をこれから考えていただくことが、とても大事だと思います。

これまでの取組が十分に活用されていなかった、その理由はどこにあるんだろうか。そこも含めて、検証していただければ、とても素晴らしいものができると思っています。

矢野委員長： ありがとうございます。藤田さん、どうぞ。

藤田委員： たびたびで申し訳ありません。

先ほど、池上副委員長からも御意見がありました、企業の登録というところで、今、資料をお配りさせていただいたのですけれども、土曜学習応援団というものを文部科学省のほうでやっております。私が所属しております青年会議所、JCという団体でも、これを今推奨してございます。

1990年代の日本の教育レベルと比べると、2000年代前半から大分低下している。または、アジア、諸外国では学力が本当に伸びてきている中で、授業時間というよりも、土曜日をどのように活用するかということが、私は非常に重要になってくると思います。

もちろん、この人材バンクを活用して、土曜日や放課後にいろんな授業を取り入れていくことが大事だと思うのですけれども、その中に、是非とも企業にたくさん入っていただいて、公立の中高の学習というものを有効なものにしていくと。これは国が進めていることなので、全国での登録が非常に多くなってくると思うのですけれども、私は目的の一つに、地元の静岡の企業がもう少し学校と結びついて、その中で、その企業が作っている商品であったりとか、活動であったりということも、積極的に小さいうちから学生たちに教えていくことが大事だと思います。

その理由というのが、人口減少というものがささやかれている中で、みんな東京や世界に行ってしまうのではなく、自分たちのまちにも素晴らしい企業があって、それを小学生や中学生のうちから触れていくことで、何か戻ってきってくれるきっかけになるのではないかというふうに思っております。人口減少もすぐに対応できる問題ではなくて、5年、10年とかかる問題なので、子供たちが一度は東京に出ても、どこかで帰ってくるきっかけを小さいうちからつくるためにも、この人材バンクというものを企業とうまく活用して、そんなきっかけを与えていけたらと思っております。

そんなわけで、静岡すんげえ～新聞というものがあるのですけれども、これはJ Cで2013年、2年前に行った事業なのですが、実は知られていない静岡の素晴らしい企業に、子供たちを集めて触れていただいて、例えば、スマートフォンの画面の研磨をしている世界的にシェアの高い企業があって、そこを子供たちに見せると、ああ静岡にこんな企業があるのだということで、子供たちの目が輝いて、世界に誇れる企業を静岡が持っているということで、地元の誇りにもつながったり、そういうことをやっていくことで、先ほど申し上げたとおり、いつか静岡に帰ってきてくれる人材につながっていくというふうに思います。

その提案が一つと、もう一つが、冊子になっております青少年育成事業支援パッケージということで、これが公益社団法人日本青年会議所の資質向上委員会というところがやっている事業なのですが、J Cのメンバーは20歳から40歳までの全国の青年経済人が、今3万6,000人位いるのですけれども、選挙のことであったりとか、世界の中の日本を強く意識できるプログラムであったりとか、国連ミレニアム目標というものがあって、これは飢餓に苦しむ子供たちのことを教える事業であったりというものを、J Cメンバーが派遣されて、学校でそのプログラムを教えていくというものなのですけれども、私の子供がたまたま私立の小学校に行っているものですから、これを使って、そのプログラムを今年やってもらうのですけれども、そういうものも、学校の学問とはまた別に、こういうプログラムを是非活用して、J Cの事業なので、なかなか県を挙げてということが難しいかもしれませんが、こういう情報をどんどん公開をして、子供たちの教育にJ Cとしても携わっていきたいと思いますし、そういうものが必要なかなと思いますので、御参考にしていただければと思ひまして、御提案をさせていただきます。ありがとうございます。

矢野委員長： どうもありがとうございました。

青年会議所は、いろいろ意欲的な取組をやっておられるのですね。大変心強く思います。

先ほど、池上先生が言われましたように、企業全般に、地域との関係強化という認識が非常に高まっていると思います。企業の社会的責任

という言葉で、よき企業市民になろうという認識が非常に高まっておりますので、きっと反応が出てくるのではないかとというふうに期待したいと思います。

六車さん、どうぞ。

六車委員： 六車です。よろしくお願いします。

去年おりませんでしたので、少しわからないところもあるのですが、人材バンクというのは、個人の登録ということだけではなくて、今おっしゃったような組織であるとか、集まりであるとか、そういうものも前提とされているのでしょうか。

矢野委員長： 少しずつ定義が違うのですが、外部の人をお願いして、教育レベルを高めるとか、地域としての教育の場をもっと広げようという取組が、調べてみたら、本当にたくさんあることがわかったのです。せっかくあるのであれば、それを生かそうと。いいアイデアで作ったけれども、活用されていないものは、もっと活用するようにしましょう。よく活用されているものは、もっとやっていただきましょう。それぞれの今までの活動を尊重しよう。

その上で、どう考えても、県全体としてのまとまりがないということがあるのです。それを県のコーディネーターを設けるとか、そこから情報発信するとか、組織というのはどうしても縦割りのものですから、運営協議会を設けて、お互いに連携し合って、今までの既存の組織、新しい組織も含めて連携を取り合ったら、きっといいもの、静岡らしいものができるのではないかと、こういうアイデアです。

六車委員： その上でなのですが、子供たちが置かれた環境の中で足りないものとか、必要なものは何だろうと考えたときに、先ほど宮城さんがおっしゃったことと関連すると思うのですけれども、いろいろな生き方をしている大人たちと接する機会が、本当に少ないと思うのです。先生と親しかなかつたり、地域の人たちの関わりというのもほとんどなかつたりするのです。

かつての地域社会というのは、すごく成功した人もいれば、すごく失敗した人もいれば、障害者もいれば、本当にいろいろな人たちがいて、その中で子供たちがいろんな影響を受けながら育ってきて、破天荒な人もいて、あの人には近付かないほうがいいよとか言われながらも子供たちが近付いて、でもいろいろないい意味での影響も受けたりするというような、そういうことが、本当にもう何もないと思うのです。

そういう大人たちのいろいろな生き方に接することによって、初めて自分の価値観とか生き方というのが、見極めていけるのかなと思うのですけれども、例えば、私が大学で教員をしていたときに、学生を連れて、村にフィールドワークに入ったら、一番学生たちが生き生きと

しているのは、本当にいろいろなおじいさん、おばあさんに出会って、その人の人生に接したときなのです。学生たちが、それに救われるというのをよく目の当たりにしていたのです。もう今では風化しているけれども、そういういろいろな大人たちと接する機会というのを意図的につくっていく必要があると思うのですが、そのときに、この人材バンクというのが、成功した個人とかではなくて、いろいろな大人たちが集まっているような組織というところとちょっと堅苦しいのですが、グループであるとか、集まりであるとかということに、子供たちが、例えば、ボランティアのような形で、ボランティア部みたいなものがあればいいのですけれども、そういうところに行って、その組織が受け入れているいろいろな活動をしていく中で、一つのことをお互いに協力し合いながらやることによって、大人たちの生き方に接することができるのかなと思うのです。

そのとき、どういう集まりがあるのかということ考えたときに、私は介護施設で働いているので、介護の現場というのは、いろいろな生き方をしてきたお年寄りがいらっしゃいますから、全ての介護施設がそういう受け入れができるかどうかわかりませんが、そういうことを理解した上で、受け入れてくれるようなところも人材バンクの中に登録していただいたり、あるいは既存の介護施設だけではなくて、例えば、老人会の延長だと思うのですが、地域でサロン活動とか、いろいろなNPO関わった活動もありますので、そういったものも一つの活用方法なのかなと思います。

矢野委員長： ありがとうございます。
他にございますか。どうぞ。

鈴木委員： では、意見を述べさせていただきます。

この新しい人材バンクについて、今までそれぞれに取り組んできた外部人材の活用を県が主導して一つにまとめる。そのことによって、どのようなメリットが生じるのかということについて考えました。

一つ目に、先ほど渡邊委員がおっしゃっていたように、県が主導するというので、まず大きな一つのバンクになるので、県民の皆さんに物すごいインパクトを与えやすい形になるのかなと思いました。利用が余り進まないことが、一つの人材バンクの課題だと思うのですが、そこを、このインパクトを使って、もっとしっかり地道に丁寧に周知していくことによって、その利用を促進させることができるのではないかと思います。

また、他に使いにくいという壁が幾つも存在すると思うのですが、まず一つは、先ほどの学びの宝箱にあったように、登録者の人となりがわからず信頼できないという課題がありました。そこについては、人材の選定というものが、どのようにされているのかということをし

っかりと明示することによって、信頼を置ける人というものを県が保証する形ができれば、使う側も安心して利用することができるのではないかと感じました。

また、今現在、この人材バンクを使っていないという雰囲気は流れている、その雰囲気をまず壊すことが必要だと思います。やはり、他の周りの地区とか学校などが利用していなければ、自分たちが一番最初に使うということでは、なかなか使いづらい現状があるのではないかと思います。なので、実際に、モデルケースみたいなものを用意して、ここの団体が人材バンクをこう使ったから、こういうことができたというものを周知することによって、もっと利用してもらえないかと思いました。以上です。

矢野委員長： 大変前向きな御意見ありがとうございました。

県のコーディネーターが中心になって、また運営協議会がそれを支えて、情報をたくさん発信していかないといけないと思います。

今、新たな御指摘の中で、そうして選ばれた人、あるいは登録された人の資格、何かタイトルを持っているかとか、そういう配慮が必要だと思います。これは、これからの検討課題として、是非決めていったらどうかと思います。ありがとうございました。

それでは、一応、皆さんの御意見を賜りましたので、大きな方向としては、これで行くということ、この実践委員会の答えにしたいと思います。

具体的な案は、これから関係部局で相談していただいて、まとめていくということになると思います。

それでは、ここで清宮委員に構想の御説明をお願いしたいと思います。

清宮委員： ここまで皆さんの議論を聞きまして、確信しました。やはり、受ける側の組織がしっかりしていない現状というか、学校単位の部活動で1人の先生が監督、コーチ全てをやっているという状態で、人材バンクに登録しているどういう方かわからない、自分よりもスキルが高いかもしれない、考え方が違うかもしれないというような人を呼んで、子供に接しさせるのは余りにも危険です。学校単位でやっているとそのエリアに例えば10の学校があったとしたら、人材バンクから10の派遣事業をしないとイケない。ということは、やはり部活動を学校単位じゃなく、地域単位で活動していくことがこの人材バンクを有効に使うことの手助けにもなるのではないかとことを確信しました。

私が今日お話ししたいことは、まさに今の発言のとおりなのですけれども、皆さん、たぶん半分位の方は見ていないので知らないと思いますけれども、今は少子化で教育現場の子供たちの数が、とてつもなく少なくなっています。これはスポーツも文化も全てですけれども、学校単位では部活動が成立しなくなりつつある。これは、ますます10年、

20年経つと確実に言えることですね。

ですので、私が今日提案したいのは、今、部活動を地域で見ている県、自治体というのではないのです。民間の総合スポーツクラブは、そういう活動をして子供たちをスポーツや文化で支援していますけれども、中学、高校というところは実は抜けているのです。私も東京でワセダクラブというスポーツNPO法人をやっていますけれども、やっているのは小学生と大人です。中高の部分というのは違うのですね。中学校は少しやっていますけれども、高校は完全に抜けています。ですので、今日の私の提案というのは、静岡県において、中学、高校の部活動を地域単位で運営をするということを提案したいのです。

それで、手元にある1枚の絵を見てもらいたいのですが、今、学校で先生も生徒も頑張っていて、充実した部活動をしているところもたくさんあるわけですね。そういうところを否定するつもりは、全然ありません。逆に、共存していくイメージですね。

例えばA校。指導者にも恵まれて施設も充実している、子供たちもたくさん集まってすごく意識の高い学校、これは今までどおり自立してやればいいのですね。B校は、部活動はあるのだけれども、専門的な先生はいません、指導者はいません。仕方がなく顧問が1人必要だからとりあえず名前だけという形で、土曜日、日曜日の活動も判子を押したから行かなければいけない、そういう先生もたくさんいると聞いています。そういう指導者がいないB校とか、あるいはC校は部員数が確保できない。子供がいないのですね。もちろん少子化で本当に子供たちの数は減っていますので、特に団体スポーツは、もうできなくなっていくます。D校、E校、それぞれの学校でそれぞれの課題がある中、今回私は、まず磐田市でこの地域化というのをテストで、モデルケースでやってみたいわけです。

現在、磐田では、ヤマハが、小学校、中学校のラグビースクールの活動を30年近くやっています。子供の数も300人、400人いまして、中学校まではそういう状態です。でも、高校にラグビー部はありません。ラグビーを続けるなら県外に出る、あるいは市外に出なければならない、こういう状況がずっと続いていまして、つい最近も、ヤマハのラグビースクールに通っている親子が僕のところに来て、清宮さん、うちの息子は高校でもラグビーを続けたいのだけど、今のままだと家を出て県外に行かないと自分のやりたいことができないのです、何とかありませんか、という相談を受けたのですが、私は、地域で部活動を運営するというプランが実現されたら、もちろんそういう悩みも解消できますし、数学部ももちろんできます。一つの学校にたくさん的人数がいなくても、幾つかの学校が集まれば何人かの子供が集まる。先生も、例えば10ある学校の中で10人の先生は必要ないのですよ。1人の先生がいればできるというものを、この静岡発で日本中に広げていきたいのです。

私は、トップアスリーの仲間たちがたくさんいて、実はこの月曜日にも東京スポーツサミットという会合をやったのですが、そこのメンバーたちと一緒にこの話をしています、清宮さん、それを日本中に僕たちが広げる活動をしますよということで、協力をしてくれるという話になりました。磐田でやって成功して、これを静岡県内、あるいは日本中に、今の少子化、教員の多忙化に合った部活動を広めていくスタートをまず切りたいわけです。

それには、何がネックになるかということ、やはり予算だと思うのですね。私が最初に必要だと思う予算は、制度をスタートさせるためのタスクフォースとか、そういう専門家たちがいろいろな問題点、課題を解決するために、1年あるいは2年というレベルでそこに入る。それで、そのうち2年、3年、4年と自立をしていくことが大事だと思うのです。いつまでも県の予算を使って、この部活動をやるために、3,000万、4,000万のお金を使うというのはナンセンスなので、部活動からスタートした地域のクラブに子供たちが、そこに小学生たちが入ってきて、今度大人たちが入ってきて、地元の名前を使ったクラブですから、企業もそれを支えようとして入ってきますよね。そうすると、まちぐるみでスポーツ、文化を応援する組織というものができてきます。こうなったら自立ですよ。県の予算も使わないでしょうし、そのエリアで子供たちを支えていくということができるようになっていくのですね。こういうものを僕はつくりたくて、磐田でいろいろな方を口説いてきました。実現ができる、もちろん川勝知事にも賛同していただいたので、今日こういう時間をいただいて本当に嬉しいです。

ちなみに、以前も少し話をしたかもしれませんが、これは、ワセダクラブという僕が東京でやっているスポーツNPOの10周年のパンフレットです。これは東京だからできました。早稲田だからできました。これは、水平展開しようと思ってもできませんでした。でも、今私が話した内容は、日本中の少子化、今の時代に即したスポーツ、文化活動になれると確信しています。

このパンフレットは、10周年のときに作ったものです。子供たちの数が2,000人位、毎週末いろいろな場所でスポーツをして、あとチアとか文化活動もしております。きょう、奥島さんに来ていただいていますけれども、奥島さんが大学にいらしたときに、こういうものを準備して僕と一緒につくったんですが、こういう経験を基に確信を持って、僕はここで言いたいと思います。これは絶対にやるべきです、静岡発で。

矢野委員長： いかがでしょうか。皆さん、御意見があれば出してください。
はい、どうぞ。

藪田委員： 昨年度からの清宮監督のお話を聞いて、大変賛成で、実は私の住む御

前崎では、御前崎ウインドサーフィングクラブというクラブを10年ほど前につくりまして、御前崎は海と風のまちということで、日本のトッププロ、大体ベストテンくらいの方が全国から移り住んでくる場所として、何せバブルの頃はトッププロですと2,000万、3,000万稼ぐような時代もあったようなのですけれども、今現在は、本当にトップでも200万とか300万、そういう収入の中で、地元御前崎に恩返しをしたいということで、今オリンピック選手を御前崎から出そうということで頑張っております。

そのトッププロたちに共感しまして、地元の私ども企業、若手経営者を中心にサポートさせていただいて、今、清宮監督が考えているような地域クラブということで進めていまして、もう高校生から卒業生が出ています。

やはり一番大変なのは、人材の確保とお金ということになるのですが、お金に関しては企業協賛等で何とか今つないでいるのですが、これもやはり全国にそのスポーツを支えたいというアスリート等はいると思いますので、今ふるさと納税等もありますけれども、アスリート減税ではないですけれども、寄附だけではなくて、そういった税金面での活動もできるといいと思いました。

あとは、地域クラブとして定着していく中で、御前崎ウインドサーフィングクラブに校長先生がいて、プロの実績もあって指導者としても優秀なのですが、中には親にも好まれない、子供にも好まれないという指導者がいる中で、地域ということで身近な人が多いので、そういう人たちに交代してもらおうとか、違う形でサポートしてもらおうということをはっきりと言える、先ほど委員長からお話があったコーディネーターという方が、こういう中にもいれば、より公平に見られていいのかなと思いました。

清 宮 委 員： 部活動なので基本的には学校の先生がその責任者としていますが、ただスポーツも文化もそうですが、教える人間とマネジメントする人間とは、別であるべきだと思うのです。そうでないと、違う意見を持った人を受け入れられないですよ。

ですから、人材バンクを生かすときも、マネジメントする監督とコーチという形で、例えばAの人が顧問、監督になって、B、C、Dの先生たちがそのコーチになるとなったら、いろんな目がそこに光ってくるわけですよ。要は、違う意見も取り入れられるし、体罰の問題だとか、偏った指導とか、そういうこともなくなってくるという、そういうことはあります。

藪 田 委 員： 少しずれてしまうかもしれないですけれども、やはり授業だけではなくて部活動を教えたいという目的で先生になる方も多いと思うのですが、特に中学、高校へ行くと担任の先生や通常授業を受ける先生より、

長い時間部活の先生といると思いますので、生徒にも影響を及ぼしやすいということで、そういった先生たちも上手に参加できるような仕組みを作っていくと難しいのかなと思います。

清 宮 委 員： だから、もちろん共存していく。別に敵視するわけではないので、恵まれていて、やる気もあって、部員を得たところはそのままやればいいわけですし。

藪 田 委 員： だから、やはり生徒と指導者でバランスが偏っているというところも多分あると思いますので、そういう調整役という形が、マネジメントという意味で必要なのかなと。

清 宮 委 員： だから、そういうものを課題として解決するために予算が必要なのです。だから、4人、5人のプロの集団を県の予算で確保してもらって、そういう問題を洗っていくのです。そして、整理していくと、そんなに問題なくいくと思います。

藪 田 委 員： 今、少しずつ課題になりそうなところだけ言わせていただいたのですけれども。

清 宮 委 員： 発言の途中ですみません。

もう一つ、自治体がやる大きなメリットがあって、中体連、高体連の大会に出られるということなのです。市や県の教育委員会とか体育協会が運営をしている部活動ですから、当然その上の団体が管轄している大会に出られますよね。

私のスポーツクラブが、今、高体連の大会には出られないわけです。例えば、ワセダクラブが高校を立ち上げてラグビーの試合に出られるかといったら出られないですよ。サッカーも同じだし、だからこそ自治体がやるということにメリットがあると思います。そういうことをやりたいのです。子供たちが練習はするけれども、舞台に立てないという部活動だけは絶対にやりたくない。そこの壁も今回このクラブを立ち上げるところで取っ払いたいわけです。団体のそういうルールというものを。学校であろうがクラブであろうが、子供たちの舞台は一つじゃないですか。そういう思いもあって、自治体がクラブ化を進める大きなメリットがあると思っています。

矢 野 委 員 長： はい、どうぞ。

加藤（百）委員： 私は、これ、文化系も入っていて嬉しいのですけれども、本当にこういう地域のクラブができるのであれば、大賛成です。

なぜかという、私の子供とか、子供と同じ学年の子供たちを見てい

ても、私はもともと東京のほうへ行きましたので、同じ年代のおいっ子、めいっ子が東京で教育を受けていて、何かに出会う機会の量とか質の差が余りにも地方は大き過ぎて、うちの娘はまだ中2ですけれども、東京へ行きたい、海外へ行きたい、静岡には、菊川にはいたくないと、もう言い始めています。

それは、私が飛び歩いている、面白そうな話を持って帰ってくるからなのかもしれないですけれども、とにかく田舎は、もっともっと子供が減少することで、子供たちが目を開く機会がもっと失われつつあるのです。そういう意味では、地域で少し広域に連携しながら、いろいろなスポーツ、もしくは芸術、もちろん学問でもいいですけれども、子供たちが興味を持ったときに、地域社会としてその興味に応えられる機会を提供できるようにするという意味で、こういう地域クラブがあって、少し学校よりは自由度があって創設しやすいというふうになるといいのかなと思います。

今回の議論を伺っていて、娘に部活の立ち上げを学校内で試みろという指令を出そうと思うのですけれども、今入っている部活が本人としては不本意なものですから、数学部でもいいし、私は農業をやっていますので農業部でもいいし、彼女が興味を持っている部活、本当にやりたい部活を立ち上げる過程で、何が問題で、もう少し広域で人が集まれば立ち上がりやすいのであれば、本当にこういうものを枠組みとして準備しないと、教育にうるさい人こそ、どんどん東京に出て行ってしまうので、そういう意味では大事だと思います。

矢野委員長： 奥島先生においでいただいておりますので、ワセダクラブをお始めになったお考えをお聞かせくださればありがたいと思います。

奥島委員： これは、清宮君が話したほうがいいと思うのですけれども、私もいろいろなクラブに関係しておりますが、ワセダクラブの場合には、地域クラブといっても、特に東京のせせこましいところで、子供たちが遊ぶ場所がないですから、そういう意味では、清宮君たちがボランティアでもって指導してくれるというので、たまたまそういうことができたということなのです。

だから、みんなにそういう機会がたくさんあるというわけではないので、大学としても、うちはマンモス大学ですから、一般の学生たちにむしろ使わせたいと私は思ったのです。

けれども、彼らが地域の子供たちとやりたいというので、学生のほうを本当は優先しなければいけないのだけれどもということで、最初は私も迷いました。しかし、熱意のある人たちの集まりがあるところでもって、事柄は進めなければいけないというふうに思って、やってみらうことにしたわけです。

私が一つクラブの問題で思っておりますのは、いろいろなクラブがあ

りますけれども、いつの場合でもクラブの指導者が一番問題だと思うのです。例えば、サッカーと野球とを比べてみますと、野球は指導者を育てることに、実は熱心ではない。それだけのお金がないものですから、非常に野球は四苦八苦しておりますが、これは日本の一つの文化になっていて、何とか頑張っております。

ただ、例えば、ラグビーの場合の問題といたしますと、ラグビーの学校数が、今、少しずつ減りつつある。どうしてそうなのかといたら、指導者の問題なのですね。

それに対して、川淵君がやっているサッカーのほうは、非常に最初からその辺りを考えてやっている。それで、Jリーグもできたことでもって、指導者養成ということを非常に熱心にやっているのですよ。ですから、どんどんと底辺を広げておりますので、それでサッカーも盛り上がりをもってきた。

一方、ラグビーは、要するにプロがありませんので、お金が入ってくるところもありませんから、指導者養成には随分苦労している。一般に会社へ入って勤めてしまいますと、そういうことに熱意を持って取り組むというのは、清宮君みたいにフリーでもって、そしてまた特殊な才能を持っている人のところへ人は集まってきますけれども、一般的に言うとは非常に難しく、危険なスポーツでもありますので、そういう意味でクラブを作るといのはそう容易ではないと思う。

また、特にラグビーの場合を考えてみますと、指導者が大事だと私は思っておりますが、そういういい指導者をどんどん広げていって、そういう熱意ある指導者がクラブというようなものをつくって指導することができるのであれば、これは非常に結構なことだと思いますが、そうでなかったら日本の場合には非常に難しい。

というのは、場所も時間的な余裕もなければ、またそれだけの指導の資格を持っている者もない。その辺りに非常に問題があると思います。

ヨーロッパの場合は、ほとんどのものをクラブでやっていますから、年寄りから子供まで一緒にやります。したがって、子供のしつけの上でも非常に役に立つ。

そういう意味では、クラブを盛んにすることについては、本当に賛成ですけれども、しかし、日本の場合、よほどその条件の整備に努めなければ、今のままではクラブスポーツを育てるのは難しいと思っております。

矢野委員長： どうもありがとうございました。

本当に重要な問題点の御指摘があったと思います。ありがとうございました。

この会議においでになりましたら、必ず1回は御発言をお願いしたいと思うのですが、どうぞお願いいたします。

片野委員： 青年農業士の片野です。先ほど加藤委員から一言ありましたが、農業部は、素晴らしい部だと思うのです。既存の部活動では、子供たちの本当の才能を発見するには、足りないものがあると、私は常々思っていたのですけれども、率直に言って、農業を部活に取り入れる学校が余りにも少ないです。

農業を学びたければ農業高校に行けばというのを、15歳の子供たちに決めさせるのは、まだちょっと選択肢として、知識として少ないのではないかと、農業者としては思っています。自分の体験を付け加えますと、中学、高校時代、農業関連の部活はなかったです。そのようなところで、地域が学校を応援したい気持ちは、皆さん、社会人、県内の県民は全員持っていると思うのですけれども、未利用な人材の発掘によって、豊富な知識、技術を学生に提供できる可能性が、農業にはあります。

農業の実情を先に述べますと、日本の農業従事者の人口ピラミッドの頂点は、60歳から70歳であるというところで、その方たちの多くが後継者不在のまま人知れずリタイアしていき、半世紀ぐらい培ってきた技術と知恵が誰にも伝わることなく失われていく可能性が、直近にあります。

そもそも学校は、そういう技術、知識を蓄え、後世に伝える場所ではないのかと私は思っております。部活動は、運動部、文化部と大別されますが、それに農業部があってもよいのではないかというのは、都合のいい農業者としての話なのですけれども、農業を部活動とするメリットとして、学校がJAや農林事務所などに相談すれば、比較的指導者は簡単に集まります。それだけではなくて、土地もあっせんしてもらえると。

そこまでいけば、農業部としての立ち上げは、県内で可能なのですけれども、それが魅力のあるものでないと、農業が魅力的なものだということがわからないと子供たちは入ってくれません。

ですので、具体的に言いますと、県主導で作物の品評会を行ったり、ネットを利用して東西の学校が意見交換できたり、また、作物状況を互いに報告し合ったり、農家に教わった知恵や技術をシェアしていくということで、スポーツとかけ持ちでもいいのです。

本当に学生が農業とかかわる時間を少しでも持っていただければ、私たち農家としてはありがたい。というのも、今、年々農家の人口は目減りしていて、仲間たちが増えていかない状況にあります。それを学校で、学びの機会の中で農業を取り入れてくれることによって、その数を増やしていけるのではないかという期待感を持っています。そのために、農家全員で支援は惜しまないと思います。

ですので、是非とも我々農家が学生の支援をさせていただく、そういう場を提供していただければということが、私たち農家の希望でもあ

りますので、今まで使ってこなかった人材を、これを機に使っていただけのようにしていただければありがたいと思います。以上です。

矢野委員長： ありがとうございます。
どうぞ。

奥島委員： 農業の問題について、私も大変興味を持っているので申し上げますと、例えば、少し話の入り方は違うのですが、今、全国に農業高校というのはたくさんあります。これは御存知のとおりです。

ところが、農業をやろうという者たちは、ほとんどいません。つまり、普通高校に入れないからそこへ入っていると、とにかく少しでもそういうところへ入っておこうか、というぐらいの形でもって集まっています。

ですから、農業を本当にやろうという意欲ある連中が、逆にだめになっていきます。それを何とかしなければいけないのではないかということ、私は前から言っておりますけれども、誰も聞いてくれません。そこで、ここで言わせていただき、誠に迷惑な話でしょうが。

というのは、農業を本当にやりたいという熱心な子供たちは、全国にたくさんいるのです。ところが、農業をやろうと思って農業高校へ入ったら、やる気のない連中ばかりです。90パーセントが農業をやらなわけです。やる気のない連中が集まっているところに、やりたい者が入って、やりたいことはできません。

なぜならば、日本の教育というのは、全部平均化されたもの、つまりレベルの低いほうに物事を合わせてやるという、日本の非常に悪い傾向がありますので、大衆認識の一番悪いところが学校教育に出ているわけですが、ですからやる気のある人たちが潰されていく。

これを全国でもって、例えば農業高校は、日本の場合には非常に大事なわけですから、昔だったら師範学校は全部無料でした。それから、士官学校とか軍関係は無料だったので、優秀なやる気のある連中がそこへ集まった。それと同じように、農業を本当にやりたい連中を国の費用で、学費免除で全部集約してそこへ集めて、全寮制で徹底的にやらせたらどうだろうと。

そういうことをやると、日本の農業というのは質の上で、それからいろいろな意味でもって気合いが入ってくるのではないかと、私はいつも思っております。そういうことが、むしろ今必要なのではないか。

どうやって農家の後継者をつくっていくかというのは、日本にとっては本当に大きな問題にもかかわらず、それについて何一つ解決方法は見つからない。他方、一生懸命やりたいというふうに思っている連中がいる。

ところが、学校へ行っても、先生たちもそういう連中だけを相手にやっていくわけにはいきませんから、その連中はせっかく意欲に燃えて

いても、学校へ入って潰されていくというのが現実であると。

そういうことをもっと考えて、やる気のある人たちを、そして日本の将来にとって大事な人たちをどうやって養成するかというのは、教育制度の問題ですから、私、ここであえて言おうと思わなかったのですが、今の問題に関連して一言言いますと、そういうことを考えております。

矢野委員長： どうもありがとうございました。
はい、どうぞ。

マリ・クリスティーヌ委員： 私、今、東京農大の客員教授をやらせていただいているのですが、非常に女の子たちが多くなってきていますので、恐らく農業をやりたくてもなかなか自分の御家族がそういうことをやっていない、全く関係ない方々が入りづらい分野でもあると思うので、今言われたように、もっと女性たちも農業高校に行けるような状況をつくっていただけるといいかなと思うのです。

それで、人材バンクについてなのですが、ずっと議論している中で、一つ大きな視点で出ていないところは、私、ロジスティクスではないかと思うのです。例えば、子供たちが、自分がこういうスポーツをやりたいとか、こういう部活に入りたいと思ってもなかなかできないとか、こういうお稽古をしたいと思っても、親がすごく熱心で興味を持ってくれますと、子供を育てる中で親がどこかへ連れて行ってくれるとか、探してくれて、でも全く関心のない親御さんたちもたくさんいらっしゃるって、そうすると子供たちにすべがないのですね。

そうすると、アメリカとか、先ほどヨーロッパの話もありましたけれども、例えばシャトルマザーというのがありますが、ボランティア活動は何かというと、子供たちをここのA点からB点までただ連れていくだけが彼らのボランティア活動なのです。

別にスポーツに興味がなくても、そういうものに関わらなくても、安心、安全に学校の子供たちを、ここの学校に連れて行ってスポーツとか何かをやらせて、それで連れて帰ってくると。

人材バンクの中に、そういうロジスティクスだけでもボランティアで参加できる人たちも入れていただくと、先ほどからお話しされている、例えば、学校でそういう部活がないときに、学校の後にここの学校からその場所まで連れていくお母さんたちとかお父さんたちでいいと思うのですが、そういう方々を入れると。

あともう一つは、日本の方はとても奥ゆかしいわけですから、私がやりたいという方に限って、少しやめたほうがいいというのがよくPTAのミーティングであるから、私がやりたいという方と、適切な方をどうやって見分けていくかということがとても大きいと思うのです。

だから、推薦という形での人材バンクの登録の仕方があったほうがいい

いのではないかと思うのです。自分から言えないけれども、この方だったらなと思われる方々が、勝手にその方のところに行って、あなたを入れますよというふうな形で、もう少し頑張られるといいかなという感じはいたします。

矢野委員長： ありがとうございます。

人材バンクに登録する人は、公募だけではなくて、推薦がいいという話が、加藤委員からもありましたが、幅広く方法を考えたほうがいいと思います。

矢野委員長： はい、どうぞ。

堀田委員： 先ほどの具体的にB校、C校という形ですけれども、これはとてもいいと思います。特にマイナーなスポーツ、本校もある一部の部活動は生徒が5人しかいませんので試合に出られません。そうすると、兄弟校とチームを組んで練習をしながら試合に出ていくと。そういった意味では、子供たちの希望に応えられるとてもいいシステムだと思います。

ただ、先ほど奥島先生から、指導者の問題について指摘がございましたけれども、やはり高校の校長としては、何かがあったときの危機管理だとか、責任の所在をどこに持っていくのだろうかとか、高校としては教育活動の一環に部活動という位置付けがあるものですから、その辺は、検討が必要だと思います。

それから、先ほど、農業高校の希望者が減っているという御認識をされていたようですが、志願倍率を見ますと、東部では農業高校の倍率が非常に高く、かなり偏差値の高い子たちも農業高校を受験しておりますので、あながちそういう部分だけではないように思います。

奥島委員： 人気が減っているとは、言っておりません。

堀田委員： すみません。今、人気が高まっていますので、農業をしたいという子たちは非常に多くいると思います。

ただ、卒業した後、専業農家でないとなかなか就農できないという、その部分も県のほうの施策等で考えられればいいと思います。以上でございます。

清宮委員： 私立の子供でも同じロジックで入ってくればいいと思うのです。別に公立の学校だけ、権利があるわけではないので。飛龍高校の子と地元の公立高校の子が一緒になって部活動をしていく。それで、飛龍の先生がコーチをして、監督をして、一般の公立高校の子が指導を受けるといふ、そういうことも出てくると思います。だから、権利を平等

に子供たちが得ることになると思うのです。

マリ・クリスティーヌ委員：：　こういうことをもっと活発にしていく上において、自治体、県の役割として大事だと思うのは、やはり保障だと思います。保険をかけてくれることが県や自治体であって、民間のやっていることに、余り細かいことに口出しをするのではなく、むしろコーディネーター役や小さいグループができないところを補佐して支えるということに専念していただけるといいと思います。

それこそ、シャトル便に乗せるお母さんたちが万が一事故に遭ったときに、こういうことをあなたたちが一生懸命子供たちとともにやっているのだから、こういう支えをしてあげましょうとか、そういう役割を考えていただけるといいと思います。

矢野委員長：　ありがとうございました。

農業についていろいろと御議論いただきましたが、この会の4つのテーマの一つが実学ということで、この人材バンクが終わったら、実学を次のテーマにしたいと思っています。これは、農業はもちろんですが、商業、工業も含めて実学というものをどうやって取り入れていくかということですね。どうやってそれを盛んにすることができるかということは、物すごく大きなテーマですが、それはその場でまた議論をすることにいたしまして、今日、御提案のあった部活動としての農業、これは検討する必要があると思いました。

それから、先ほど御前崎の例が出されましたけれども、各地域単位で自発的にいろいろなスポーツ振興をやっているところが、他にもあるのではないのでしょうか。清宮委員提案の磐田のスポーツクラブというのは、ものすごく意欲的で、これはこれで今後の方向ということになると思いますけれども、一般的に地域単位でやっているスポーツ、文化活動、そういうものを教育委員会や事務局で、一度調査されたらどうかと思います。今日は一例が出されて、私は興味深く伺っていたので、御検討いただければと思います。

それでは、皆様の御意見として、まず磐田市にラグビーを旗印にして地域のスポーツクラブを作るという方向性については、今後具体化しようということによろしいでしょうか。

(委員一同賛意を示す。)

矢野委員長：　どうもありがとうございました。今日はこれで大きな方向付けができたと思います。

清宮委員：　若者が発言したがついています。

矢野委員長： どうぞ。

鈴木委員： 僕自身、中学校のときですけれども、地域のクラブに入ったことがあります。陸上部で、部活動にも入っていて、クラブにも参加する形をとっていたのです。

意識が高い学生が、その地域にある陸上のクラブに参加して、陸上を専門に担当している指導者から指導を受けて、更に上を目指していくという、地域クラブみたいなものに入っていたのです。

その中で、先ほど清宮委員がおっしゃっていたように、団体の競技などは、今は学校の単位でしか大会に出られないのです。なので、学校単位ではなくて、地域単位での参加というものを地域、市が主導して与えることが、地域クラブにとって、一番重要なことではないかと思いました。

また、中高一貫で指導を受けることは、とてもメリットがあると思います。一流指導者が、長い目で指導ができるということは、子供のことをより詳しく知り、的確な指導を行うことができると思います。

また、現在、特定の部活動をしたいがために、自分の地域から離れた中学へ進学する子供や、そのような子供たちの負担を減らすことができ、また近くにその部活動がないから諦める場合の解決の手段にもなると思います。

また、その地域クラブでは、さまざまな年代の方々が参加することによって、先ほど言っていたように、生涯スポーツの観点から見ても、世代間を超えて、とてもいい場なのではないかと思いました。以上です。

矢野委員長： どうもありがとうございました。

御議論は尽きないかと思えますけれども、多くの意見を頂戴しましたので、ここで知事から御意見があれば、一言お願いしたいと思います。

川勝知事： 意見といいますよりも、御礼を申し上げます。

まず、今日は人材バンクについて、委員長自ら文書を作ってくださいまして、御提案されまして、ありがとうございました。そして、それが委員の皆様方全体の御同意を得たということでございますので、これを作っていくということでございます。もちろん、これは次の総合教育会議におきまして、御提言申し上げるということでございます。

まず、突破口の一つとして、清宮委員が御提言されました、磐田の自治体の中でスポーツの地域クラブを作っていくということです。県として全面的にサポートしていくということで、磐田の渡部市長さんとも、これからこの点について具体化を図るためにやっつけようと思っております。

それで、まずお金でございますけれども、これは出します。ともかく

イニシャルコストというのは、やはり何をするにしても要りますので、教育に対してお金は惜しまないと。全て他のことを犠牲にしても、ここには出すという姿勢でありますので、委員長からこれだけ出せと言っていたら、それに応じた負担を議会にもお諮りいたしまして、それを工面するというふうにいたします。

それから、やはり人を教育すると。文武芸三道鼎立と言っていますけれども、学問も大切だと。だけど、成績はいいのですよ。学問が大切だということがわかっていけばいいと。そういう人でなければいけない。スポーツは下手でもいいのです。スポーツを好むということがとても大事です。芸術を愛すると。芸術は、無芸大食でもいいのです。だけど、芸術を愛するという、そういう全体として、プロもいるし、それを愛する、好む、尊ぶという人たちをつくっていかうということなのであります。

そして、富士山の登り口がたくさんありますように、英数国理社だけではないのだということで、そしてきょうは片野委員から御発言がありました。農業士は立派な人間と言われる富士山の士ですね。あるいは、林業の場合は林家、それから漁業経営士、そして農業の場合には青年農業士というのがあります。これは、農業士となればプロフェッサーです。青年農業士も自薦・他薦で出てくるわけですがけれども、これをアソシエイト・プロフェッサーと、准教授として私は見ておまして、数学ができるのと園芸がよくできるのと、どちらが重要かと、どちらも重要だと、こういうスタンスでございます。

ですから、先生方には、本田宗一郎さんが言ったそうですね。障子を開けてみると、もっと世界は広いだろうと、こう言うわけです。学校だけが学ぶ場ではありませんよと、学校だけが人を教える場所ではありませんよということですね。外には学ぶ場がたくさんあるし、そしてまた教える人がたくさんいらっしゃる。

これを全体として人材バンクとして再編成していく、これも幾つもの問題が出されましたので、試行錯誤ですけれども、こうしたものを作っていくということで、来年の当初予算、場合によってはもう少し具体化が早くできれば、9月の補正、12月の補正で資金を捻出したしまして、前に進めていくという方向性を、今日お話をいただいたものを実現する真水というのですか、これを出すつもりでありますので、どうぞその点は御安心をいただくといいですか、厳しく要求をしていただくように、委員長、副委員長先生にお願いを申し上げます。

次回は、総合教育会議に委員長先生がお越しくくださるということでございますので、そのときの報告もじかにこの実践委員会で御報告申し上げるといふ段取りで進めさせていただきたいということです。

本日は誠にありがとうございました。

矢野委員長： ありがとうございました。

誠に心強い御発言で大いにありがたく、また嬉しく思います。

次回のこの会議は9月3日に予定されておりまして、順番で言うと実学に入るのですが、今日の議論を踏まえて、関係部局でこれから相談していただいて、もう少し具体的に方向性、中身を詰めて欲しい、それを9月3日の会議で御披露いただいて、それをまた少し議論した上で、実学の部分に入ろうと、このように思っております。

次回、9月中旬の総合教育会議には、私も参加します。もちろん、そこで知事から今日の話について、御提案をいただけるのですが、私も委員長として、皆さんの御議論の内容について、総合教育会議の場でお話をさせていただく機会があれば、お話したいと思います。

それでは、これで会議を終了して、事務局に進行をお返しします。

事務局： 矢野委員長、どうもありがとうございました。

委員の皆様、長時間にわたり意見交換ありがとうございました。

矢野委員長からお話がありましたとおり、次回の実践委員会は9月の開催を予定しております。また、正式な通知等は、後日事務局から出させていただきます。

それでは、以上をもちまして、第2回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会を終了いたします。皆様、どうもありがとうございました。